

令和元年度第1回親育ち促進部会 摘録

日 時 令和元年6月26日（水） 18：30～20：00

場 所 こどもみらい館 第1研修室

出席者 吉川左紀子部会長，榎谷美幸委員，大澤彰久委員，杉原颯太委員，
中川佐和子委員，長谷川ユリ委員，藤本明美委員，丸橋泰子委員，
三浦正人委員，宮井真澄委員，吉澤浩則委員（11名）

欠席者 禹満委員，矢野武也委員，山上恭子委員（3名）

次 第

- 1 部会員及び事務局の紹介等
- 2 報告
プログラムの実施状況について
- 3 議題
「子ども・若者に係る総合的な計画（仮称）」の策定に係る親育ちを促進
する支援の今後の方向性について

(司会：梶原担当)

事務局	<p>資料1「委員名簿」～資料3「京都市はぐくみ推進審議会について」に基づき説明</p> <p>(質疑応答なし)</p>
事務局	<p>資料4「親育ちに係る事業の実施状況について」に基づき説明</p> <p>(質疑応答なし)</p>
事務局	<p>資料5「子ども・若者に係る総合的な計画(仮称)の策定について」に基づき説明</p> <p>(資料5-2について)</p>
藤本委員	<p>「親の成長を支援」とあるが、行政は直接親に対して支援するというより、環境の整備や仕組みの構築を行っているため、親の成長を促す環境づくりや仕組みづくりという文言の方が良いのではないか。</p>
事務局	<p>行政はサービスの提供だけでなく、地域の担い手のコーディネーター役として環境づくりも行っている。今後、その点にも留意しながら文言については引き続き検討を進める。</p>
大澤委員	<p>「地域のつながりの希薄化」とあるが、まちづくりを所管する部署との連携も視野に入れ、地域コミュニティ活性化に向けた施策を推進していただきたい。</p>
事務局	<p>地域のつながりの希薄化は行政だけで解決できる課題ではないため、地域コミュニティとの連携は不可欠である。計画の全体像においても「子ども・若者とその家庭をみんなで支え・育む社会」を掲げている。さらに、重点項目の一つに「はぐくみ文化を推進するネットワーク機能の強化」も位置付け、地域コミュニティの強化に向け、引き続き取組を進める予定。</p>
藤本委員	<p>主な取組の中に「はぐくみ文化」を位置付け、市民の力を活かすという趣旨の取組を具体的に掲げていただきたい。</p>

事務局	はぐくみ文化を推進するネットワーク機能の強化については、別の部会で議論を行っているが、今後も引き続き、様々な主体と連携しながらはぐくみ文化を浸透させていくとともに、京都はぐくみ憲章の実践推進について取組に位置付けたいと考えている。
大澤委員	京都はぐくみ憲章の認知度はまだまだ低いと感じている。私ははぐくみネットワークの幹事長でもあるため、今後、はぐくみネットワークの活動を通じてはぐくみ文化及び京都はぐくみ憲章の周知を行っていく。啓発の取組について皆様からアドバイスがあればいただき、今後の取組に生かしていきたい。また、行政においても、会議資料等に京都はぐくみ憲章のロゴを入れるなど、より一層の啓発を行っていただきたい。
吉川委員	こどもみらい館において「京都はぐくみ憲章」の理念は掲示されているか。
事務局	ボランティア養成講座の場で紹介するなど、行政としても積極的に啓発を行っている。
杉原委員	「これから親となる世代」に、妊娠している方だけでなく、これから子どもを産むことを考えている人も含まれているのであれば、親としての心構えや必要な知識等をただ発信するのではなく、対象者に合わせた情報を的確に伝えることが重要。子育てにかかる金額について知識がないため、子どもを産もうか悩んでいる友人が周囲にもいる。機会の提供よりも、相談内容の種別に応じた相談窓口を設けるなど工夫が必要。
丸橋委員	不登校・ひきこもりも重要な課題であると感じている。地域のつながりを拒否している方や問題を抱えている方は交流の場には出向かない。そのような方が行かざるを得ないような場をつくり、地域とつながったことで救われる仕組みづくりが必要。様々な部会において子どものために議論していただいているが、この親育ち促進部会において、不登校やひきこもりについて議論してもよいのか。
事務局	京都市では地域コミュニティの活性化に取り組んでいるが、課題は多い。一つ行えば解決するというような施策はなく、はぐくみ文化の

	<p>実現のため、関係部局や地域の関係機関と連携しながら、様々な施策を進めていくしかないが、今後も効果的な施策について検討を重ねていきたいと考えている。</p> <p>また、ひきこもり等については別の部会でも審議を行っているが、親育ち促進部会においても重複して議論していただいても構わない。</p>
長谷川委員	<p>「支える」や「不安を取り除く」といった表現は何かをしてあげるという印象を与えるため、「支え合う」など、みんなで一緒に取り組んでいくという文言の方がよい。</p> <p>私自身がコーディネーターとなり親と話し合いを行う際は、失敗の中にも学ぶことはあり、他人に伝えることで、他人の成功のきっかけや体験談となるため、失敗は無意味なものではないと伝えている。子育て中の親を支援するという視点だけでなく、子育て中の親自身も誰かの役に立っているという視点も大切である。</p>
宮井委員	<p>児童館は0歳から18歳まで幅広い世代に利用していただく施設であり、新計画の主体の一つである。これまで、計画は行政の方針であり、我々はその方針を受ける立場だと思っていたが、自分たちで実現するものだと実感した。計画の中で、各団体において取り込むことができるような提案をしていただけるとありがたい。</p>
三浦委員	<p>地域の中にある施設が地域と関わりを持たないことは不可能であり、児童館においても、地域とのつながりは特に意識している。児童館としてできることを考え、既存の地域団体及び新規の地域団体に児童館の事業に参加してもらうことで仲介を行っている。</p>
中川委員	<p>私の娘も児童館にお世話になった。児童館を通じて娘だけでなく私にも友人ができ、大変感謝している。</p>
吉澤委員	<p>子育て支援は保育園だけでは取り組めない。自園に通っている子を見ることで精一杯になってしまう。地域のつながりの中に保育園も含めてもらえるように日頃から取り組むことが大切だと考えている。また、子どもの成長を保護者に伝えることで、保護者とコミュニケーションを図るよう心がけている。</p>

榎谷委員	幼稚園に入園するまでの親子関係が弱い家庭が多い。スマートフォンで検索した情報に捉われる親が多く、教諭のアドバイスに対し、インターネット上の情報と違うと反論されることもある。インターネットからのみ情報を得るのではなく、出産前から入園までの間に、様々な方と直接話すことで情報交換を行い、知識を得ることができると良い。
丸橋委員	子育てに不安を抱える親の負担が少しでも軽減できるよう、一時預かりを無料で実施し、親が休憩したり相談にのってもらえる場があるとより良い。
宮井委員	若い世代が結婚したいと思えるような意識づくりがないと、少子化の進行は止められない。 <p style="text-align: right;">(以上)</p>